



Go West!

佐賀県立唐津西高等学校

学校だより NO.22 R5.3.15

【建学の精神】朝に希望 夕べに感謝

文責 学校長 下村 昌弘



E-Mail shimomura-masahiro@education.saga.jp

ジェントルであれ -西高生の品格よ ^{ほんじやく}盤石たれ！-

どの学校にも校訓・校是がある。

「ヤング・ジェントルマン—知なき勇は卑なり—」。どこかの学校の校是だったか、あるいはスローガンだったかもしれないが、学校全体がそれを目指すのは「かっこいいな」と、ずっと印象に残っているフレーズだ。なにより「ジェントル」の響きがいい。

先日、ある会で久々に80歳をとっくに超えた高校時代の恩師に会い、改めて「ジェントル」の意味について教えていただいた。「ジェントル」とは「優しい、親切な、おだやかな、礼儀正しい」という意味があるが、もともとはラテン語の“genz”（ジェンズ：種族）を英語型にしたもので、「種族に属する者、本筋、主流」とかいうのが本来の意味だそう。ここから「^{おうよう}鷹揚」（鷹が空を舞うように何物も恐れず悠然としていること）とか「こせこせしない」とかいう意味が出てきたらしい。

つまり、「よそ者」とか「征服された種族」がとかく持ちやすい「ひがみ」とか「卑屈さ」というものがなく「心からのびのびとして、別に威張るわけではなく、品位品格を備えている」という状態が「ジェントル」ということらしい。

加えて「フランク」についても教えていただいた。

今では「ざっくばらん、率直、裏表がない」という意味に使われているが、かつてはライン川流域を中心に成立していた“フランク王国”に属する」という意味だったそう。

そこから派生して「征服民族に備わる鷹揚さ」、「よそ者でない自信」という意味になり、今日ではもっぱら「素直さ、率直さ」という意味で用いられている。

ここで伝えたいことは、「ジェントル」にせよ「フランク」にせよ、根っこの部分には「本流」とか「ホンモノ」とか「内面的な自信」がその要素になっているということだ。

とすれば「ジェントル」とか「フランク」という状態は、借り物や飾り物では成立しないことになる。内面からの鍛錬が必要であり、威張るのではなく、自分自身に頼りうる深さと落ち着きがなくてはならない。私のように、たえず周りの動きや状況の変化に心揺さぶられるようではとても「ジェントル」とか「フランク」にはなれないわけだ。

人間の尊厳を人種とか征服者・被征服者とかいう区別なく受け止めるのが今日の常識であることからすると、「ジェントル」とか「フランク」とかいう言葉の語源に感覚な違和感がないわけではない。

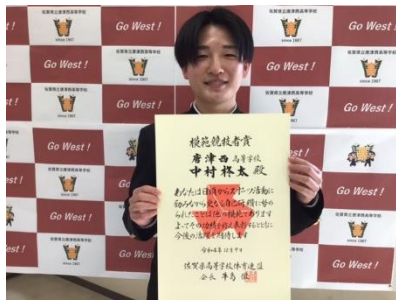
しかし、「心理的に鷹揚になる」とか、「本当に正直である」とかいうためには、まず、「内面的な安定」や「揺るぎない自信」が必要だということにはナルホドと感じる。「鷹揚」を盤石にするためには、まず人間的な深さを確立しなければならない。

「浅い瀬にこそさざ波は立つが、深いところに波は立たない」と言う。「ジェントル」に向け、お互いまだまだ修行が必要なようだ。そういえば「師弟同行」、これも本校の校是だ。



卒業生の中村さん 模範競技者として高体連表彰

3年生の中村柊太さんが令和4年度の模範競技者賞に輝いた。



この賞は部活動への取組のみならず、学業への取組や日常生活への姿勢が合わせて高く評価されるものだ。

中村さんはサッカー部のキャプテンとしてチームを引っ張るとともに大学進学を目指して受験勉強にもしっかりと時間を割いてきた。「やるべきことを意識しながら妥協せず徹底しようと頑張った。将来は教育に携わり子どもたちを育てたい」と抱負を語った。

「食」を深掘りする ーボランティア部からつ応援市場に参加ー

2月5日、ボランティア部と家庭研究部、そして食に関心のある有志が唐津市水産会館で開催されたからつ応援市場へ参加した。今回はいつものような生産者販売の手伝いではなく、講師の方をお招きして地元食材を使って一緒に作って食べて食について考えるイベントだった。



この内容について2年生の坂本理帆さんが高校生記者として「食は多くの人をつながりを実感できるもの。私は将来食に関する仕事につきたい。これからもこうした活動に参加し食について広く深く考えたい」と佐賀新聞に寄稿し3月3日に掲載されている。<https://www.saga-s.co.jp/articles/-/998549>

ボランティア活動を通して社会の様々な活動を理解し、人々と協働して課題解決に努力する体験、社会に有用な自分の特性を確認することの意義は高校生にとって教科の勉強に劣らず重要だ。西高は体験を学びに変える学校だ。全ての生徒が自分の興味関心に従ってそこを深掘りしてほしい。

人間のレジリエンス ー震災から12年に感じたことー

2011年3月11日、私は東京で仕事をしていて、職場のビルの11階で強い揺れを体験した。建物は左右に大きく揺れ、壁の本棚は軒並み崩れ落ちてきた。東日本大震災。ビルが倒壊して死ぬかと思った瞬間だった。



あれから12年、干支が一回りした。奇しくも震災の起こる数ヶ月前に福島県の飯舘村に民泊をした農家さんとそれ以来交流を続けている。その知り合いの農家さんは仲間と一緒に自分たちの町の日常を守ろうと努力を続けていられる。

「レジリエンス」とは回復力、弾性（しなやかさ）のこと。人間は弱い。その営みは容易に破壊されてしまう。しかし同時に人間は強い。この春の卒業生が3年間のコロナ禍をかいくぐり立派に自立したように。

私たちは、被災者を弱者と見て物資を送ったり寄付金を送ったりするだけではなく、コミュニティが持つこうした強靱な力を後押しするのだという意識を強く持つところこそが次の手を考える大きな一手になるのだと思う。

1年間の御愛読ありがとうございました。令和4年度の最終号です。

【3月後半の主な行事】

- 3月16日(木) AED講習
- 18日(土) 北部地区合同学習会
- 19日(日) 定期演奏会
- 24日(金) 修了式
- 4月6日(木) 始業式